

Title	「笑い」を哲学する
Author(s)	武田, 朋士
Citation	臨床哲学のメチエ. 15 P.27-P.29
Issue Date	2006-03-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5462
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「笑い」を哲学する

武田 朋士

「哲学」と「笑い」。決してこれまで哲学に無視されてきたわけではないが、正面きって取り上げられることも少ないのが、「笑い」というテーマである。哲学者の「笑い」に関する著作としてはベルクソンの『笑い』が有名だが、他にというとなかなか思いつかない。そのようなテーマを「哲学」と題する授業で扱うことには、もちろんためらいもあった。しかし、身近なところから「哲学」に触れてもらい、それぞれの経験と言葉を通じて「哲学する」ためには、ちょうどいいテーマではないかとも常々考えていた。そこで、不安はあったものの、準備期間がしつかりとれそうだったので、「笑い」をテーマに授業をさせてもらうことになった。

授業で「笑い」を扱うといっても、「笑い」についての理論を単に伝えても面白くないと思い、できるだけ生徒たちとの対話を通じて、「何が面白さをつくるのか」について考えていくという形をとることにした。とは言え、どの角度からどう切り込むのかということは何らかの形で提示しないことには、「笑い」という漠然としたテーマを展開することはできない。「何が面白さをつくるのか」という問いにしても、日常で「面白さ」を感

じる場面は実に様々であり、そのどの場面を対象とするかで、「笑い」概念の広がりや構造は異なってくる。そこで、「笑い」のイメージを共有してもらうために、漫才のビデオを見るということを最初に行うことにした。（「対話」を成立させるためには、このような形で共通経験をもつことで、漠然とでもテーマに関するイメージを共有しておくことは重要であると、私は考えている。そうでないと、最初のイメージのすりあわせだけで多くの時間を費やすことになる。最初にイメージの共有をいかに行うかが、対話をコーディネートする者のひとつの大きな仕事であると思う。この点については、最終回に生徒たちとコーディネータとで1年間の授業を振り返る時間を持った時、生徒からも言及された。）



2週にわたって授業を担当することができたので、初回の授業で漫才（笑い飯・フットボールアワー）のビデオを10分ほど鑑賞してもらい、4～5人のグループで、どこがどう面白かったかを話し合ってもらった。授業の副テーマとして「面白さを人に伝えることはできるか」を掲げてはいたが、自

分が面白さを感じたところを取り上げ、それに言葉を与え、他人に伝わるようにするということを経験してもらえれば今回は十分だと考え、その経験を反省してもらおうということではなかった。それよりも、面白さを人に伝えることを通じて「面白い」という感情を言葉に起こしてもらい、2週目で「何が面白さをつくるのか」について考えるための土台作りをしてもらった。最後の10分ほどで、それぞれの話し合いを踏まえて、どこがどう面白かったかを全体に向けて発表してもらい、初回の授業を終えた。

2週目は「何が面白さをつくるのか」について対話を通して考えていくことにしたのだが、対話の道筋をつけるために、前回生徒からでた意見と関連をもつような「笑い」についての哲学者の考えを幾つか提示し、それを絡めながら、対話を進めていった。最初に、漫才をしている人の顔の面白さに焦点をあて、それを、ホップスやアリストテレスの「笑い」に関する考えと交差させるところから入った。引き合いに出したのは、次のような考えである。「『おかしさ』とは『みにくさ』のひとつの部分にすぎないのである。なぜなら『おかしさ』とは、他人に苦痛も危害も与えることのない欠陥であり醜悪さであるから」(アリストテレス)。笑いとは、「思いがけず我ながら満足のゆく行為をやった場合とか、他人の中に何か醜いものを認め、それと比べることにより、突如自分を賞賛する

ことによってもたらされる」。「そしてこれが最も多くみられるのは、自分に能力が極めて乏しいことを意識している者の場合であり、彼らは他人に欠点を求めることで自らをいとおしく思わないわけにはいかない」(ホップス)。

ホップスの言うような「自分と比べて」という「笑い」の基準は斥けられ、「お笑いをしている人という期待」、「漫才の舞台という背景」が問題にされた。そうして、自分と比べてどうか、顔そのものが面白いかではなく、笑いの対象となっているものとその対象がもつはずの背景との不一致に、どうやら「面白さ」を作り出す何かがありそうだという方向に進んでいった。そこから、単に「不一致」であれば、「恐さ」が生じてもいいのではないかという意見が出され、そこで、ショーペンハウエルの、「笑いが生じるのはいつでも、ある概念と、なんらかの点でこの概念を通じて考えられていた実在の客観との間に、突然の不一致が知覚されるためにほかならず、笑いそのものがこの不一致の表現なのである」という考えを持ってきて、「笑い」の理論としてこれで十分かどうかを考えた。そうして、「不一致」が「笑い」になるか、「恐れ」になるか、「驚き」になるかの違いは何かということが問われた。結局、「驚き」は「笑い」にも「恐れ」にも入っているものであり、「笑い」や「恐れ」は「驚き」の一種であるということで落ち着き、「笑

い」と「恐れ」を分けるのは何かが、最後の論点となった。そこで再び、「笑い」の対象とそれをみている側との距離（対象に対する「安心感」が、「恐れ」ではなく、「笑い」を生みだす、など）に視線が向けられたところで、時間切れとなった。

2 回の授業を連続性の強いものにしたため、初回に欠席した数名が、2回目の授業に参加しづらそうだったのが大きな反省点であったが、「対話」を通じて「笑い」について哲学するという大きな流れは、理想的な形でつくれたように思う。最初に漫才のビデオを見ることで対話の入りをはっきりさせ、論点を明確に整理し、今何が問題になっているかをできるだけ丁寧に押さえながら対話を進めたことで、短い時間ながら、突っ込んだところまで話をもっていけた。「不一致」の理論において「恐れ」との違いが問題になったことで、「笑い」の対象だけではなく、それと笑っている自己との関係が問われたわけだが、そのようなメタの視点を自然な流れの中で確保できたところに、今回の対話のひとつの大きな収穫があった。個人的な感情を言葉に起こすところからはじめて、自己への反省的な視線を、他人と共有する地平で確保する。そのような形で、個人的・主観的なものとして（例えば、「笑いのつぼ」というような言い方で）片付けられてしまいがちな「笑い」を、うまく問うことができた。

対話という形にこだわり、私はその論点整理などに徹したため、漫才のビデオを見ることと幾つかの笑いに関する哲学者の言葉を提示する以外は、生徒から出てくる言葉だけを頼りとした。そういう意味では、生徒の力に大きく依存した授業であり、洛星高校の生徒たちのコミュニケーション力や論理的思考力、視点の鋭さに大いに助けられた。したがって、これが「授業」と呼んでいいものであったかどうかは、生徒たちの判断に委ねるしかないが、この対話を通じて確保された視点や今回の一連の対話が、少しでも皆の「考える力」の滋養になっていればと思う。

（たけだともひと）